

# 修復連鎖の終了手続きとしての合意形成フェーズ コミュニケーション・チャレンジの多人数会話の観察から— Consensus-Building Phase as a Procedure to Close Repair Sequences: An Analysis of Multi-Party Conversation with the Communication-Challenged

榎本 美香<sup>†</sup>, 岡本 雅史<sup>‡</sup>  
Mika Enomoto, Masashi Okamoto

<sup>†</sup> 東京工科大学, <sup>‡</sup> 成蹊大学  
Tokyo University of Technology, Seikei University  
menomoto@media.teu.ac.jp, explicature@gmail.com

## Abstract

This article is an empirical investigation of when and how repair sequences in multi-party conversations are closed with the ‘consensus-building phase,’ which we found in our previous study. Analyzing 93 minutes of excursive talks with the communication-challenged, we have newly found that the consensus-building phase is likely to occur when repair is initiated with utterances of ‘Partial Repetition,’ ‘Completion Request,’ and ‘Possible Understanding,’ against a trouble-source turn. In addition, when all the participants are involved in repair sequences, the sequences are often closed with some acknowledgement of repair execution.

**Keywords** — multi-party conversation, repair sequence, the communication-challenged, consensus-building phase

## 1. はじめに

Clarkら[2]は会話とは一発話ごとに発話された内容を参加者たちの共有基盤(common ground)に追加していく営みであると述べている。そして、重要なことは、ただある発話が発されるだけでなく、それが聞き手たちに理解され受け入れられた段階でこの共有基盤が成立することである。従って、会話でのやりとりは、ある発話の提示とその発話の受理という対から構成されると考えられている[2]。発話の受理がなされたかどうかは、‘I see’ ‘uh huh’ などといった理解の表明、提示された発話の理解を前提とする適切な次の発話、相手発話の例証などといった聞き手の次発話で示される様々な証拠から推定できる[1]。

逆に、聞き手が話し手の発話を何らかの理由によってよく理解できなかった場合、そうした発話の受理が不可能となり、聞き手は一つのトラブルを抱えることになる。それを解消するために、聞き手は話し手に元の発話の「修復(repair)」を要求

することになる。[7]は、聞き手が聞き取りや理解の問題を抱えた場合、次発話の位置が修復を開始する場所であるとしている。そして、3人以上の参加者からなる会話を考えると、さらにどの聞き手が修復を開始するのも問題となる。Egbert[3]は多人数会話における修復の特徴として(1)二人以上の聞き手によって同一のトラブル源に対して修復が開始される場合や、(2)トラブル源の話し手が修復する前に別の他者によって修復が試みられる場合等の事例を報告している。例1は前者の例<sup>1</sup>で、01, 04, 06, 08からなるCの発話に対し、09, 10 でAとBが同時に「てんぷらだったのは夕飯か」と尋ねている。

(例1) 1131 253.555--265.7562  
01 TS C: じゃあ:昨日:+  
02 A: +うん  
03 B: +うん  
04 TS C: ちよつと+  
05 A: +うん  
06 TS C: おーあてんぷ(笑\_ら)+  
07 A: +<笑>  
08 TS C: てんぷらだったんで (D\_チョ)  
09 RI B: (U\_(W\_ユウハ|夕飯))?  
10 RI A: (U\_うん夕飯?)  
11 RE C: (L\_そうそ (L\_うん) そうそ (L\_うん) うん  
12 TR B: (L\_うん)  
13 TR A: そっか+  
14 A: +ちよ (L\_つと油っこいもんもたれるよね  
15 ACK C: (L\_あー

榎本・岡本[4]はこうした聞き手たちによる修復を各参加者の理解度という認知的な観点から分析している。複数の聞き手が修復連鎖に関わる場合、トラブル源となった発話に対し、聞き手たち各々が自己の認知状態をディスプレイし、参加者間での共有基盤化が図られる。そして、トラブル

<sup>1</sup>転記中に用いた+記号は後続発話が先行発話の終了後間髪入れずに発されたこと(latching)を示す。(W\_)記号は、いい息け、いい誤りなど正規の発音とは異なる発音がなされたことを示す。(U\_)記号は、その部分が非常に不明瞭に発音されていることを表す。(D\_)は発話断片で何を話そうとしたのかわからない部分である。(笑\_)記号で囲まれた箇所は笑いながら発話されている。(L\_)などの罫線記号は重複開始位置を示す。()内の数字は前後の間の秒数を示す。

源(Trouble Source;TS)～修復開始(Repair Initiation; RI)～修復実行(Repair Execution; RE)という一連の修復連鎖に加え、参加者たちがトラブルが解消したことを示しあう〈合意形成フェーズ〉が存在する可能性を示唆している。例1で言えば、12Bの「うん」や13A「そっか」といったトラブル解消の証拠やその承認15C「あー」の連鎖がこれに相当する。

しかし、上記の研究からは、多人数会話における修復が一樣に〈合意形成フェーズ〉で終了されるのかどうかは明らかではない。会話を観察すると、必ずしも参加者全員が修復の終了を認める発話を行っていないケースも散見される。そこで本研究では、修復が聞き手によって開始された場面を詳細に観察し、どういったトラブルに対しどのような修復と〈合意形成フェーズ〉が生じるのかを明らかにする。

## 2. 方法

### 2.1 分析資料

分析資料として、精神障害や高次脳機能障害などの病名が与えられた人々(the communication-challenged; CC)が参加する3人会話を用いる。CCは、他者に自己の発話がどう受け取られるというメタ認知に支障を抱え、会話中で修復が頻繁に生じる。そこで本研究では、以下のデザインで収録されたCCたちの3人会話3組分を分析対象として用いる。

**会話参加者** : CCは精神科病院付属のデイケアに通っている人を対象とした。入院ではなく通院を行っているCCを対象としたのは、症状が比較的落ち着いており、30分程度の会話への参加が大きな負担にならずに可能なためである。

**会話の設定** : 参加者たちは簡易収録室において、丸テーブルに等間隔で着座した状態で会話を行った。会話開始時の話題はサイコロを振って決めるが、途中でサイコロを何度振りなおして話題を変えても、サイコロの目にない話題を話してもよい旨を教示した。会話時間は約30分程度である。

**音声・映像の記録** : 各参加者の音声は、単一指向性説話型マイクロフォンを通じて別々のトラックに録音されている。また、各自上半身と円座全体の映像が4台のデジタルハンディカムで録画されている。分析にはこれらの記録データを用いる。

## 2.2 ラベリング

### 2.2.1 修復連鎖構造

修復開始発話を手がかりに、以下のラベリングを行う。

#### トラブル源となった発話(Trouble Source; TS)

RIの修復対象となる発話をTSとする。

#### 修復を開始する発話(Repair Initiation; RI)

2.2.3の修復開始技法が用いられた発話をRIとする。

#### 修復を実行する発話(Repair Execution; RE)

RIに後続し、RIの話者の抱えるトラブルを解消しようとする発話をREとする。REとなる発話はTSを行った話者だけでなく、助け舟として修復を手助けしようとする他の参加者の発話も対象とする。

#### トラブル解消を示す発話(Trouble Resolution; TR)

RIで顕になったトラブルが解消したことを示す発話をTRとする。TRの付与対象はTSの話し手以外の全員である。

#### TRを承認する発話(Acknowledgement; ACK)

REに対してTSの話し手が行う「うん」「そう」などをACKとする。また、この後さらにTSの聞き手たちが行う「うん」などのfollow up発話が打たれることもあり、それらをすべてACKとする。

例1でいえば、01,04,06,08に渡るCの一連の発話がTSであり、09B, 10Aの発話がRI, 11CがRE, 12B, 13Aの発話がTR, 14AがACKに相当する。これら4つの機能のうち、TR, ACKが出現した連鎖を〈合意形成フェーズ〉と呼ぶこととする。

### 2.2.2 参加者たちの認知状態

修復連鎖構造に属する各発話の発話者がトラブルを抱えているか抱えていないかによって以下2通りに分類する。

#### トラブルを抱えている人(Person-in-Trouble; PiT)

先行する発話の聞き取りや理解、あるいは受理に困難をかかえている人を指す。典型的に、修復開始者はPiTである。

#### トラブルを抱えていない人(non Person-in-Trouble; nPiT)

トラブルを抱えている人の問題を取り除くことのできる人を指す。修復を実行する参加者、あるいはトラブルが解消したことを示す参加者はnPiTである。

今回は、発話内容を参照にトラブルを抱えているか否かの判断を行った。従って、各発話に対して上記のラベルを付与し、発話を行っていない聞き手にはラベルを付与していない。例1では、TSとなった発話を行ったCは、てんぶらが夕飯のメニューであったことを知っているためnPit, その情報をCが発話に含めなかったために夕飯のメニューだったのか否かに確信を持ってないAとBはそれぞれ09, 08の発話を行った段階ではPiTである。「夕飯?」という問いにBが承認を与えられると、AとBのトラブルは解消し、13, 12ではそれぞれnPitとなる。

### 2.2.3 修復開始技法

修復を開始する発話(RI)がどういったタイプの修復発話であったかを Schegloff ら [7] を参考に以下のように分類する。

**非限定的質問(Non Specific question; NS)** 修復開始者が聞き取りや理解にどういったトラブルを抱えているか限定しない「え?」「何?」といった質問による修復の開始である。

例2はAが家にネズミが住み着いたという話をしてしている場面である。24の「エアコン近くのとこに」というAの発話の後、Cは27で「うち猫」と話します。これはAの26の発話開始と同時であったため、ほとんど聞き取れない発話であった。そこで、29でAは「うん?」と問い返しを行っている。これが非限定的質問(Non Specific; NS)となる。全修復中、NSに相当するものは6ケースであった。

(例2) 1131 693.95-707.34  
 20 A: 中学校に住んでた時 [もの家もネズミが  
 21 B: [うんうん  
 22 A: 住み着いち [やって+  
 23 B: [うん  
 24 A: +(W\_アンナ|穴)ぼこ開けちゃったの  
 A: [エアコン近くのとこに  
 25 B: [えーへーえーえーえ  
 26 A: [住みかにし [ちゃったの  
 27 TS C: [うち猫  
 28 B: [うんふ [うん+  
 29 RI → A: [うん?;NS  
 30 RE C: +猫  
 31 A: ネコ:ネコ住み着いてたの?

**カテゴリ限定的質問(Category Specific question; CS)** [7]によれば、「誰?」「どこ?」「いつ?」といった質問により、トラブル源となった発話に出現したどの部分が聞き取れなかったのかを示すものとされる。彼らが挙げて例を以下に示す。

(29) [KC-4: 3-4]  
 F: This is nice, did you make this?  
 K: No, Samu made that.  
 F: → Who?  
 K: Samu

Kの発話‘Samu made that.’に出現した“Samu”の部分の聞き取れなかったFは‘Who?’と聞きなおしている。これがカテゴリ限定的質問(Category Specific question; CS)とされる。ただし、今回我々が観察したデータにはこのタイプの修復は出現しなかった<sup>2</sup>。

### 位置限定的質問(Position Specific question; PS)

「誰に?」「誰と?」というようにトラブル源となった発話にで使われていた表現の一部を用いて、聞き取れなかった箇所を質問するものとされる。

(35) [SBL: 2: 1: 8: 5]  
 Bea: Was last night the first time  
 you met Missiz Kelly?  
 Marge: → Met whom?  
 Bea: Missiz Kelly.  
 Marge: Yes.

トラブル源となったBeaの発話中に使われた“met”を繰り返し、人名の部分を“whom”で尋ねている。このタイプも我々のデータには出現しなかった。

### 狙いのある質問(Target Question question; TQ)

トラブル源となった発話の一部を繰り返し、そこに「って何?」のような質問語を付加するものである。

例3はサイコロを振りなおし次に話すお題を決めたシーンである。サイコロの「当たり目」という表示が出た後の41Cの発話に対し、Bは43で「当たり目って(W\_ナーニ何)」と狙いのある質問(Target Question; TQ)をしている。TQに相当するものは5ケース存在した。

(例3) 1131 247.6343-255.3697  
 40 C: あ  
 41 TS C: 当たり [目だ  
 42 RI → B: [当たり目って(W\_ナーニ何)?;TQ  
 43 RE A: 当たり目は好きな:お題でしゃべっていいの  
 44 C: じゃあ:昨日:

### 繰り返し(Partial Repetition; PR)

トラブル源となった発話の一部をそのまま疑問調で繰り返す発話である。

例4は話すお題を決めるのにサイコロを振った後の会話である。50Cは何の目が出たかを聞いている。それに答えるBの51「びびった話」に対し、Cはその発言を52で「びびった話:?’と繰り返し(Partial Repetition; PR)ている。

(例4) 1331 82.7250-88.3750  
 50 C: なんだ?  
 51 TS B: びびった話+  
 52 RI → C: +びびった話:?’

<sup>2</sup>対象とした3会話の他7会話を観察したが、CSと次のPSは一度も出現しなかった。日本語話者による会話では非常に稀なケースであることが推測できる。

53 RE B: (W\_ビービッタ|びびった)は「なし  
54 TR C: 「あーびびった話  
ね:  
55 B: あの一

PRに相当するものは観測データ中最も多く、29ケース存在した。ただし、これに対するREは、例4のように先の発言を繰り返すものと言い換えるものの両方が存在する。PRは、聞き取りの問題だけでなく、理解の問題にも関わるものであると考えられる。

**補完要求(Completion Request; CR)** トラブル源となった発話で言及されていない情報を要求する発話である。ただし、その情報は、トラブル源となった発話に埋め込むことが可能なものである。修復開始に用いられる表現は、CSやPSで用いられる質問語と語彙的には同じである。しかし、[7]は脚注(15)で、「語彙的には同じ表現を用いても、まったく異なる類の開始子であるようなもの」と述べている。我々もこれに習い、この種の修復に対し新たな項を立て、補完要求(Completion Request; CR)とすることにする。

(例5) 1131 1622.5362-1631.3278  
60 TS C: 手作りじゃないけど  
61 TS C: 持ってけ  
62 TS C: くれたの「(D\_オ)(U\_お渡し)チョコ  
63 A: 「そうトヤマさんには  
64 RI → B: 誰が?  
65 RE A: (U\_ワカバヤシ)さんが  
66 TR B: ふうん

例5がCRタイプの例である。60,61,62でCはバレンタインにチョコレートを渡すよう、スタッフからチョコレートを貰った話をしている。64でBは、チョコレートをくれたのは誰なのかを聞いている。誰からチョコレートをもらったのか、Bの発話では省略されている。それを補うように要求しているのが64である。このタイプのものは10ケース存在する。

**理解候補の提示(Possible Understanding; PU)** TSとなる発話を解釈しなおし、「○○ということ?」といった理解候補の提示(Possible Understanding; PU)を行う発話である。

例1の09B「(U\_(W\_ユウハ—夕飯))?」、10A「うん夕飯?」という発話がPUである。どちらもほぼ同時に、Cの08「てんぷらだったんで(D\_チョコ)」が夕飯がてんぷらであったと解釈してよいのかを問うている。

これが修復開始技法に属するのか、修復実行に属するのかは[7]においても混乱がみられる。西坂[5]は、この点に関して訳注33で、「ここで提示された理解の候補が、トラブル源の話し手に受け入

れられたとき、その受け入れをもって修復そのものの実行と考えるのが良かろう」と示唆している。トラブルを抱えているか否かという認知的観点から考えても、09B, 10Aの発話がなされた段階では、『てんぷらが夕飯だったか否か』に対する確信はAやBにはなく、11Cの「そうそうそう」をもって初めてそのトラブルが解消することになる。そこで、本稿でも、理解候補の提示は修復開始であり、その受け入れ発話の方を修復実行とみなすことにする。このようなケースは全部で12ある。

**間違いの指摘(Error Specification; ES)** トラブル源となった発話に含まれる情報が誤っていることを指摘する発話である。これについては、Schegloffら[7]ではなく、Svennevig[8]が修復の一種として挙げているものである。これは聞き取りや理解の問題ではなく、受理の問題とされている。先の発話を受け入れられないという認知状態にRIの話し手が置かれていることを考えれば、これも修復開始技法とみなしてよいであろう。

(例6) 1131 546.4500-572.0605  
70 C: んだんだん慣れてきました  
デイ「ケア:七年ぐらい通ってんねん+  
71 A: 「(W\_ウーン|うん)  
72 A: +あー七年「も通ってるんだ  
73 B: 「すごいね:  
74 B: 私「何年通ってんだろ  
75 A: 「何歳の頃から通ってるの?じゃあ  
76 TS C: 二十歳:ぐらいから  
77 A: あっ「そうなんだ  
78 RI → B: 「えー今二十七になんないじゃん  
「(W\_マーマダ|まだ);ES  
79 RE C: 「二十四  
80 RI B: 四でしょう?;PR  
(0.8)  
81 RI A: じゃあ十七?;PU  
82 RE C: 高校終わったらす「ぐ  
83 TR A: 「高「校終わったらすぐか+  
84 TR B: 「ふうん  
85 TR A: (W\_ソッ|そう)か:  
86 ACK C: うん  
87 ACK A: うん

例6では、Cがデイケアに通って七年になる話をしている。75Aの「何歳の頃から通ってるの?」という質問にCは76「二十歳ぐらいから」と答え、これがトラブル源となる。現在のCの年齢を知っていたと思われるBはそれでは計算が合わないため、78でその間違いの指摘(Error Specification; ES)をしている。同様のケースは8例みられた。

**真偽要求(True or False; TF)** 「本当?」「そうなの?」といった質問により前の発話の真偽を問うものである。先行研究では、修復開始技法に含められていない。しかし、ES同様、先行発話の受理に関わる問題を表明する機能を担っているという観点から、本稿では修復開始の一種と考える。

(例7) 1231 1503.5415-1513.6500  
 90 TS B: 十時ちょびつと過ぎたんだよな;  
 91 RI → A: あ本当?;TF  
 92 RE C: うんもう終わりだよ  
 93 RE B: うん十分か十五分かな  
 94 TR A: あーでも退席とかほらトイレとか自由だって言っ  
 てたから

例7は、この会話の終了時間について話している場面である。90の10時過ぎに終わるといふBの発話に対し、Aは91で真偽を問うている。これに対し、92Cと93Bは同時に、本当である旨を答えている。TFに属する事例は4ケース存在した。

**応答の不在 (Not-Answering; NA)** 隣接対第一部分に対し、第二部分がなされないことである。TF同様、これも先行研究では修復開始技法に含まれていない。通常、第二部分の不在は、申し出の拒否や不承諾といった否定的意味が含まれる。しかし、本データに出現する第二部分の不在は、第一部分の聞き取りの問題として対処されることから、ここでは修復開始技法に含める。

(例8) 1331 1076.9944-1087.3750  
 100 A: 車買いたいんだけど  
 101 B: はい  
 102 A: やっぱり十万なんぼしてっから  
 103 TS C: うんかみさんがだめだっかってか  
 RI → A: (0.55秒);NA  
 104 RE B: だめだっかって?+  
 105 TR A: +んーだめだっつってんの

例8でAの車を買うのは難しいという発話に対して、Cは103で「かみさんがだめだというのか」と質問をしている。これに対して、0.55秒間Aからの応答はない。これを前の発話に対する聞き取りの問題だと解したBは104で先のCの103の発話の一部を繰り返している。これに対して、Aはすぐに105で反応しているため、ここでは答えづらかったというより、やはり聞き取りに問題があったことがわかる。今回の観察対象の中には本ケースしかNAは存在しなかったが、榎本・岡本[4]でも同様のケースが報告されており、数は少ないながらも散見される修復であると考えて良いのではないだろうか。

### 3. 分析

3会話中にみられた修復総数は56であり、全4227発話に対し、227発話と全体の5.4%にあたる<sup>3</sup>。以下、この56の修復連鎖の特徴を分析する。

#### 3.1 修復連鎖構造に関する傾向

同様の修復連鎖構造が2回以上出現したものは表1のようになる。これをみると、RI, REが共に

<sup>3</sup>無音区間が出現した時点で一発話とする間休止単位にて換算している。

表1 2回以上出現した連鎖構造

連鎖構造	出現頻度
RI-RE	19
RI-RE-TR	17
RI-RE-TR-TR-ACK	3
RI-RE-TR-ACK-ACK	3
RI-RE-TR-ACK	2
RI-RE-RI-RE-TR	2

表2 ひとつのTSに対しRIの行われた回数の頻度

RIの回数	出現頻度
RI1回	47
RI2回	8
RI4回	1

一回ずつ出現する、あるいは、RI, RE, TRが共に一回ずつ出現するという連鎖が最も多いことがわかる。これに比して、RI, RE, TR, ACKがそれぞれ1回ずつ生じるといふ連鎖はあまり多くない。それよりは、TRが異なる話者によって2回行われるRI-RE-TR-TR-ACK連鎖、ACKが異なる話者により2回行われるRI-RE-TR-ACK-ACK連鎖の方がやや多くなっている。

また、1度しか出現しなかったが、TSの二人の聞き手が同時にRIを行うものやREを手助けするものもみられた。それら以外では、修復が一回では成功せずに、何度かRIが繰り返されるものもあった。一つのTS発話に対して、RIが行われた回数の生起頻度は表2のようになっている。

RIが一度しか行われなことが47回と圧倒的に多いが、2回生じること8回とやや多い。3回というデータは観測されなかったが、4回というものが1例だけ存在した。これらは1度目の修復ではトラブルが解決されなかった折に、2回2回と繰り返し修復が開始されることを意味する。

#### 3.2 修復開始技法のタイプと〈合意形成フェーズ〉の関係

修復開始技法としてどのタイプの発話が用いられたかと、その時〈合意形成フェーズ〉が見られたかを分析する。ただし、修復開始技法は2回以上用いられることもあるので、1度目の修復開始技法と〈合意形成フェーズ〉との関係を表3に、2度目移行の修復開始技法と〈合意形成フェーズ〉との関係を表4に示す。

表3で全体の生起度数が高いのはPR, CR, PUである。特に、PRとCRに顕著なのはRI-RE-TRまでの修復連鎖で終わることが多い点である。RI-RE-TR-ACKに至る修復連鎖はそれほど多くない。ところが、2度目移行で用いられている修復開始技

表3 1度目の修復開始技法と〈合意形成フェーズ〉の生起頻度

開始技法	修復連鎖構造		
	RI-RE	RI-RE-TR	RI-RE-TR-ACK
NS	2	3	1
TQ	1	1	1
PR	9	9	3
CR	2	5	2
PU	2	3	3
ES	2	3	1
TF	0	4	1
NA	0	1	0

表4 2度目以降の修復開始技法と〈合意形成フェーズ〉の生起頻度

開始技法	修復連鎖構造		
	RI-RE	RI-RE-TR	RI-RE-TR-ACK
NS	0	1	0
TQ	0	0	1
PR	1	0	6
CR	0	0	0
PU	2	1	3
ES	0	1	0
TF	0	0	0
NA	0	0	0

法をみると、CRの生起度数が各連鎖とも0になっている。このことは、CRという修復開始技法は1度目にはよく使われ、その場合はTRまでの〈合意形成フェーズ〉を持つが、2度目以降はまったく使われないということである。一方、PR、PUは2度目以降にもよく使われている。しかも興味深いことに2度目以降にこれらの修復開始技法が用いられると、修復連鎖がRI-RE-TR-ACKに至ることが多い点である。このことはトラブルが一度で解決しなかった場合、さらに用いられる技法はPRやPUであり、この場合、ACKを含む〈合意形成フェーズ〉にほぼ至るということを意味する。

### 3.3 修復への関与者数と〈合意形成フェーズ〉の関係

修復連鎖に3人のうち何人が関与したかと、その時〈合意形成フェーズ〉が見られたかを表5に示す。なお、表には、1回以上のTRが出現したものをRI-RE-TR連鎖として、1回以上のACKが出現したものをRI-RE-TR-ACK連鎖として合算して示している。

表5から、修復への関与者数は2人の方が多く、その時、〈合意形成フェーズ〉をもたないRI-RE連鎖も結構あることがみてとれる。ただし最も多くなるのはRI-RE-TR連鎖である。3人が関与する場合をみると、RI-REだけの連鎖に比して、TRやTR-ACKを含む〈合意形成フェーズ〉の出現率

表5 修復への関与者数と〈合意形成フェーズ〉の有無

連鎖構造	関与者数	
	2人	3人
RI-RE	15	4
RI-RE-TR	21	5
RI-RE-TR-ACK	5	5

が71.4%となる。3人が関与する場合には、〈合意形成フェーズ〉へと進むことが多いことがみてとれる。

### 3.4 参与者たちの認知状態と修復への関与者数が〈合意形成フェーズ〉に及ぼす影響 x

修復連鎖における参与者たちの認知状態として、TSの聞き手が二人ともトラブルを抱える場合、TSの聞き手が一人だけトラブルを抱える状態、TSの話し手がトラブルを抱える状態という3つがある。それぞれの認知状態に応じて、修復への関与者数と〈合意形成フェーズ〉の有無はどのように変化するのかを表したものが表6である。なお、TSの聞き手が二人ともトラブルを抱えていたか否かは彼らがそれを表明していなければわからない。二人がトラブルを表明するということは修復への関与者数は必然的に3人となるので、関与者数2人、PiT2人の欄にはΦを記入してある。

関与者数が2人の場合からみてみよう。TSの聞き手1人がトラブルを抱えるとき、RI-RE連鎖、RI-RE-TR連鎖が共に多くなる。一方、この時、RI-RE-TR-ACK連鎖へ進むことは5ケースと少ない。これはPiTがTSの話し手であった場合も同様である。このすべてのケースでRIの修復開始技法のタイプは間違いの指摘(ES)であるが、間違いの指摘を行った者がTRを受けて、ACKを行うケースは存在しなかった。

次に関与者数が3人の場合をみると、TSの聞き手1人がPiTであった場合のRI-RE連鎖、RI-RE-TR連鎖の度数が関与者数2人の時より大幅に減少している。逆に、RI-RE-TR-ACK連鎖はそれほど大差がない。このことは、3人が修復に関与する場合、ACKが行われることが多いことを示している。また、TSの聞き手2人がトラブルを抱えた場合に、〈合意形成フェーズ〉の存在しないRI-RE連鎖が全く生じていないことは興味深い。2人ともがトラブルを抱えた場合、少なくともTRが示され、その内半数はそれに対してTSの話し手がACKを行っている。なお、TSの話し手1人がトラブルを抱えた場合には、他の聞き手が2人とも修復に関与するというケースも存在しなかった。

表6 参与者たちの認知状態と修復への関与者数による〈合意形成フェーズ〉の有無の正規頻度

連鎖構造	関与者数					
	2人			3人		
	PiT2人 (TSの聞き手)	PiT1人 (TSの聞き手)	PiTI人 (TSの話し手)	PiT2人 (TSの聞き手)	PiT1人 (TSの聞き手)	PiTI人 (TSの話し手)
RI-RE	Φ	15	0	0	4	0
RI-RE-TR	Φ	19	3	2	3	0
RI-RE-TR-ACK	Φ	5	0	2	3	0

#### 4. 議論

3.1の分析から、すべての修復連鎖に〈合意形成フェーズ〉が含まれるわけではないことがわかる。また〈合意形成フェーズ〉にはTRやACKが様々な形で含まれている。これらの連鎖構造はどのようにして決まってくるのであろうか。

3.2の分析では、一般に1度目の修復開始では、PR, CR, PUが用いられやすく、この場合、〈合意形成フェーズ〉はRI-RE-TR連鎖が多く見られた。一方、一度目の修復でうまくトラブルが解消されなかった場合、PR, PUが再度用いられ、この場合〈合意形成フェーズ〉はRI-RE-TR-ACK連鎖からなっていた。

Schegloffら[7]は、脚注(15)で修復開始技法の『強さ』について言及している。彼らが挙げている技法は、NS→CS→PS→TQ→PR→CR→PUの順で強くなるという。その根拠として、より弱いものは強いものに発話途中で変更可能であること、複数回修復開始が行われる場合、より弱いものから強いものへという順序で用いられることが挙げられている。彼らのいう『強さ』が何を表すのかは定かに述べられていないが、より深刻なトラブルに対して用いられる手段と考えると辻褄があうのではないだろうか。1回で解決できない問題が生じたとき、さらに強力な解決手段であるPRやPUが用いられるとするなら、本研究の分析結果とも一致する。そしてより深刻なトラブルが生じたときには、〈合意形成フェーズ〉にTRだけでなく、ACKが付随するというわけである。

3.3の分析から、修復に関与する人数が少ないときは、RI-RE-TR連鎖に留まることが多いが、関与する人数が増えるとRI-RE-TR-ACK連鎖まで〈合意形成フェーズ〉が進むことがわかる。さらに、3.4の分析からは、トラブルを抱える人がTSの聞き手1人である場合は、RI-RE連鎖、あるいは、RI-RE-TR連鎖が多いが、TSの聞き手2人がトラブルを抱えている場合は、〈合意形成フェーズ〉のないRI-RE連鎖で終わることはなく、RI-RE-TR-ACK連鎖の比率が高くなることがわかった。修復への関与者の人数やトラブルを抱えている参加者の人数が多くなるほど深刻なトラブルが生じていると

考えられる。

RI-RE-TR-ACK連鎖が生じていた例6を再度みてみよう。最初の修復開始は、78BのESである。これにたいして、Cは79で「二十四」と答えるが、何歳からデイケアに通っていたのかということはまだ明確にならない。80でBは「四でしよう?」とPRを行うが、Cからの応答はない。ここで、Aが81で「じゃあ十七?」とPUを提示することで助け舟をだす。この発話は同時に、Aも76のTSに対してトラブルを抱える聞き手であったことを示す。そして、82でようやくCから「高校終わったらすぐ」という修復が行われる。これに対し、AとBは矢継ぎ早に83, 84でTRを行い、さらにその後Aはもう一度85でTRを行っている。そして、CのACKが86で行われ、Aも再度それをfollow upして87でACKを行っている。このように、唯一修復を実行する権限をもったTSの話し手がなかなかそれを行わない時、修復開始と修復実行が何度も行われ、その中で皆が修復連鎖に関与していく。そして、この連鎖から抜け出すためには、単にTRが示されるだけではなく、TSの話し手や他の聞き手からACKが出されるという手続きが踏まれるのだと考えられる。

#### 謝辞

本研究は、科学研究費補助金(基盤研究(B))(課題番号:23330183、代表者:榎本美香)の助成を受けて進められている。本稿で用いているデータの収集にあたっては、茨城県立医療大学 山川百合子氏、社会福祉法人木犀会 ケアステーションコナン小谷泉氏に甚大な力添えをいただいた。ここに記して深く感謝する。

#### 参考文献

- [1] Clark, H. H. (1996) *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [2] Clark, H. H., & Schaefer, E. F. (1989) "Contribution to discourse", *Cognitive Science*, Vol. 13, pp. 259-294.
- [3] Egbert, Maria M. (1997) "Some interactional achievements of other-initiated repair in multi-person conversation" *Journal of Pragmatics*, Vol. 27, No. 5, pp. 611-634.
- [4] 榎本美香・岡本雅史. (2010). 多人数会話において修復はどのように生じるか—コミュニケーションにハ

- ンディキヤップを抱える人を含む雑談データを通じてー. 日本認知科学会第27回大会予稿集.
- [5] 西阪仰(訳). (2010) 会話分析基本論文集: 順番交替と修復の組織. 世界思想社.
- [6] Schegloff, E. A. (1992) "Repair after next turn: the last structurally provided place for the defence of intersubjectivity in conversation" *American Journal of Sociology*, Vol. 95, pp. 1295-1345.
- [7] Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977) "The preference for self-correction in the organization of repair in conversation" *Language*, Vol. 52, No. 2, pp. 361-382.
- [8] Svennevig, J. (2008). "Trying the easiest solution first in other-initiation of repair" *Journal of Pragmatics*, Vol. 40, No. 2, pp. 333-348.